

総論

満点	50点	目標得点	43点	試験時間	60分	偏差値	70
大問数	4	小問数	41				
【解答形式】		選択式	24/41問	記述式	17/41問	論述式	0/41問
【問題難易度】		C	0/41問	B	15/41問	A	26/41問
※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す							

Topics

- 1：形式的な面での大きな変化はなかった。出題形式はマーク・記述併用で、分量は変化なく、試験時間を考慮すれば時間配分も苦労はしないはずである。
- 2：本学部の特徴でもあるように、出題分野は古代から現代までのテーマ史を中心とした出題である。全体的な難易度も、標準よりやや易になり、教科書の基本事項を押さえれば満点も狙えるはずである。しかし、今年度は出題分野にバランスが欠けていた印象がある。
- 3：今年度は、従来は必ず出題されている文化史が出題されなかった。しかし、従来は出題されているので、来年度以降はまた出題される可能性が高いので十分な対策をしておきたい。他の部分については例年通りの傾向と言える。

こんな力が求められる！

教科書の内容を超えた問題もあるが、7割から8割近くは基本的な事項のため、教科書を完璧にマスターすることが最優先事項である。時代、分野ともに幅広く出題されるため、不得意な分野を作らないようにしたい。現役生の弱点でもある現代史についてもぬかりのない勉強が必要である。

本学部の特徴は、前述したようにテーマ史となっており、お茶ゼミの講習で行われるテーマ史のテキストやテーマ史を中心とした問題集を1冊仕上げればかなりの高得点が期待できるはず。また、合格を確実なものとするためには、難問とされるものも、ある程度解答できるようにするべきである。そのためには、正誤問題では少数ではあるがやや難問とも言える問題もあるので、早稲田の他学部の過去問などで正誤問題の練習をし、単純な用語暗記だけの学習に陥らないように勉強の方法を配慮するべきである。

また、記述に関しては、解答自体は平易なものが多いが、意表をつく語句など漢字が正しく書けるかどうかが焦点になるので、お茶ゼミのテキストの太字部分については、最低一度は書くようにしたほうがよいであろう。

今年度の出題はなかったが、傾向としては毎年文化史が出題されていたので、鮮明な印象を残すためにも、仏像、建築物、絵画などの美術作品は、図説などを用いて写真の確認や、解説に目を通しておくことが大切であり、史料問題も今後増加することが予想されるので、史料集なども普段から読むことを怠らざにするよう心がけるべきである。

さらに、何度も述べるが、本学部ではテーマ史が中心となるので、一つのテーマを立て原始から現代までの流れをつかむことが大切である。

【I】

予想配点	12/50 点	時間配分の目安	10/60 分
出題分野・テーマ	古代～明治の中央行政組織の歴史		
出題形式	マーク・記述併用		
小問別解答と難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 問一：A 問二：A 問三：B 問四：A 問五：A 問六：A 問七：A 問八：A 問九：A 問十：A 問十一：A		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：3月期②1・2回，4月期1・2回，5月期1回，6月期1回，7月期3・4回 11・12月期 センター：3月期①3回・②1・2・4回，4月期2回，5月期2回，7月期2回，11・12月期		

●本大問の特徴・概要

古代から近代までの中央官制および行政組織に関するオーソドックスな設問である。記述はどれも単純なものなので完答は必須である。一方で、正誤問題は、中央官制の組織図や幕府体制の図などを教科書などを利用して日頃から確認する作業が大切である。難易度としてはどれも標準よりはやや易なため得点差が出ないようにしたい。

●注目すべき小問

どの小問も当学部らしい出題形式および難易度であり、特に難問や目立った問題はない。あえて、あげるとすれば、以下の問題であろう。

(問三) 弾正台に関する正誤問題。

この問題は特定の教科書に掲載されているものの、消去法が使えずに苦労した受験生も多いはずである。しかし、律令制の組織を、用語集などを用いてしっかりと学習しておけば、それほど難しくは感じないだろう。

(問八) 室町幕府の職制。

この正誤問題は、細かい情報に惑わされがちだが、逆にそのような細かい情報を含んだ選択肢を排除すれば、正解を導き出すのは容易である。

すべての設問がセンター試験レベルであるので、ここは全問正解を目指すべきである。

【Ⅱ】

予想配点	12/50 点	時間配分の目安	15/60 分
出題分野・テーマ	古代～近代の内乱の歴史		
出題形式	マーク・記述併用		
小問別解答と難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 問一：A 問二：A 問三：B 問四：A 問五：A 問六：B 問七：B 問八：B 問九：B 問十：A		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：3月期①4回、②4回、4月期1・2・3回、5月期2・4回 夏期近現代史Ⅰ1回、11・12月期 センター：3月期①2回・②3・4回、4月期2・4回、5月期1回、7月期2・3回、11・12月期		

●本大問の特徴・概要

本大問は、古代から近代までの日本国内で起こった争乱に関するもので、難易度、分量ともに標準的なレベルである。特徴としては、歴史的イベントや争いなどの対戦図式や争乱の鎮定者について正しく理解できているかを問う設問が多い。また、年代並び替えや、戦国法の詳細についての設問は当大学の他学部や他大学でも出やすく、受験生が苦手とする分野なので、早い段階から対策をする必要がある。

●注目すべき小問

(問六) 戦国大名、(問八) 長州征討に関する正誤判定。

問六はやや内容も深くまで及んでいるためやや難問であるが、本学部の受験生のレベルからみて、正解を出すべきである。また、問八の選択肢は「第1次征討後」「イギリスに接近して」という部分が間違いであると判断した受験生もいたはずである。

(問七) 豊臣秀吉に関する時代整序。

少し悩むところだが、①と②の順番が分からなくても、③が最初であることは明白なため、選択肢は一つしかないの、正解できるはずである。

一方、本大問で難問になりえるであろう問題は、以下の設問であろう。

(問九) 赤報隊偽官軍事件。

この事件は最近の入試問題でも出題される機会が増えてきたものである。事件の概要についての説明は省略するが、幕末期におきた官軍側の謀略事件の一つである。そして、今回はその隊の総大将である相楽総三を記述させるのだが、そこは早稲田大学らしいところである。まだまだ多くの教科書には登場していないが、早稲田に合格しようと思うのであれば、教科書以外の歴史書に親しむことも必要である。あえてBにしたが、赤報隊は歴史的にも有名なため本来ならば合否を分けるレベルの問題とまではいかないかもしれない問題である。また、今後は同大学他学部や慶應義塾大学などでは、大正デモクラシー期に、この赤報隊について調べた人物である「長谷川伸」という人物もチェックするべきである。

【Ⅲ】

予想配点	13/50 点	時間配分の目安	20/60 分
出題分野・テーマ	原始～現代の身分に関する歴史		
出題形式	マーク・記述併用		
小問別解答と難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 問一：B 問二：B 問三：A 問四：B 問五：B 問六：A 問七：B 問八：A 問九：A 問十：A		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：3月期①2回、②1回、4月期2・3回、6月期1回、7月4回、9月期1回 冬期社会経済史Ⅰ1・2・3回期、1月期3回 センター：3月期①1・3回・②4回、4月期2回、5月期3回、7月期2回、冬期実戦演習		

●本大問の特徴・概要

本大問は、原始・古代から現代までの身分に関する歴史を扱っており、テーマ史としても頻出テーマである。また、全体的な難易度も大問Ⅰ・Ⅱに比べて、やや難である。記述、選択、正誤でどれも時代区分の正しい把握や歴史的用語の深い理解が問われている。特に正誤問題では、普段から用語集などで、ある程度頻度の高い用語に関しては、説明文までしっかりと読み込んでおく必要がある。

●注目すべき小問

(問二) 律令制の身分に関する正誤判定。

選択肢のオで「良民と賤民の境界はあいまい～」とあるがまさに「あいまい」な選択肢である。これは特定の教科書表示に類似している部分がある。

(問四) 「凡下」の記述解答。

やや難しい問題である。短いリード文からこの解答を判断するのは難しいはずである。

上記2つの設問に関しては、教科書を読むことも大切であるが、古代の土地制度や史料などで、時代によって身分の名称が変化することを把握するべきである。今後、土地制度に関するテーマ史も出題が予想されるので、しっかりとした対策をとっておきたい。

(問七) 名子・被官に関する正誤問題。

この設問も難問に見えるが、解答は可能である。受験生の中には、選択肢の文章の中の「水呑百姓と同じ立場」にひかれ、これを正解としたかもしれない。

(問九) 四民平等に関する正誤問題。

この設問は得点差がでる問題である。しかし、消去法をうまく使えば解答は容易である。

その他の設問は、平易なものが多いので、確実に正解を導きだしたいところである。

【IV】

予想配点	13/50 点	時間配分の目安	15/60 分
出題分野・テーマ	近世～現代の社会経済史		
出題形式	マーク・記述併用		
小問別解答と難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す 問一：A 問二：A 問三：B 問四：B 問五：B 問六：A 問七：A 問八：A 問九：B 問十：A		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：6月期1・3・4回，7月4回，夏期近現代史Ⅰ2回，夏期近現代史Ⅱ1・4・5回 9月期1回，冬期社会経済史Ⅰ2・3回期 センター：5月期3回，6月期1・2回，7月2期回，9月期2回，冬期実戦演習，直前戦後史		

●本大問の特徴・概要

本大問は今年度のセンター試験でも出題された、社会経済史に関する問題であり、早稲田大学頻出のテーマである。得点差がでやすい設問が多いが、難易度や分量は適切である。近世の部分については、若干文化史を絡めた設問もあったが、通史のなかでも扱うものなので、難易度は高くない。しかし、農業に関する分野は必ず、時代区分・人物と著書は整理をつけるべきである。

●注目すべき小問

(問四) 近世の漁業、(問六) 地租改正条例改正に関する正誤問題。

この2つの設問は得点差が非常にでる問題である。しかし、誤りが見つからなくても、教科書程度の知識と消去法の組み合わせで解答することができるのでレベルとしては標準である。

文化史を大問のテーマに設定した問題がなかった中、問三・六の設問は少し文化史の分野を絡めた設問である。だが、これは前述したように、通史のなかでも出てくる用語なのでしっかりと確認をしておきたい。

(問九) 統制経済下の制度に関する選択問題。

本問の中で解答に不安を覚えた設問である。解答は消去法を使えば導き出すことができる。しかし、試験会場では、本当にこの解答でいいのだろうかと悩んだ受験生も多いはずである。それもそのはずで、まず「保甲制」は日本史の知識ではない。そして、『日本史用語集』(山川出版社)によれば、『日本史A』の教科書1冊が取り上げている用語であり、頻度は大変低い。しかし、だからといって解答できる、できないは別の問題のため、確実に正答すべき問題である。